市町村職員等在宅医療・介護連携基礎研修（奥州会場）	資料13
平成28年10月18日	
長寿社会課　地域包括ケア推進担当	

看取りケアにおける実態と課題

特別養護老人ホームいいとよ

発表者
赤坂はるみ
共同研究者
藤原幸恵　菊地良介

社会福祉法人平和会　法人概要

社会福祉法人平和会

理事長　金澤 重俊

事業所数：１５事業所
職 員 数：約２９０人
法人設立：平成１１年７月
提供サービス

特養	1	ＧＨ	2
短期入所	1	相談室	1
訪問介護	1	地域包括	1
訪問入浴	1	保育園	2
通所介護	3	認定こども園	1
小規模	2	サ高住	1

社会福祉法人平和会　組織体制

社会福祉法人平和会

- いわさき認定こども園
- ときわだい保育園
- おにやなぎ保育園
  小規模多機能ホームおにやなぎ
- デイサービスセンターなめしだ
- デイサービスセンターむらさきの
- 小規模多機能ホームうえのまち
  グループホームうえのまち
  高齢者専用賃貸住宅うえのまち
- デイサービスセンターいいとよ
  地域包括支援センターいいとよ
  いいとよ介護保険相談室
  ヘルパーステーションいいとよ
  グループホームいいとよ
  特別養護老人ホームいいとよ

特別養護老人ホームいいとよ

1.開設年月日　平成14年4月1日

2.事業内容　長期入所50名 5ユニット
短期入所10名 1ユニット

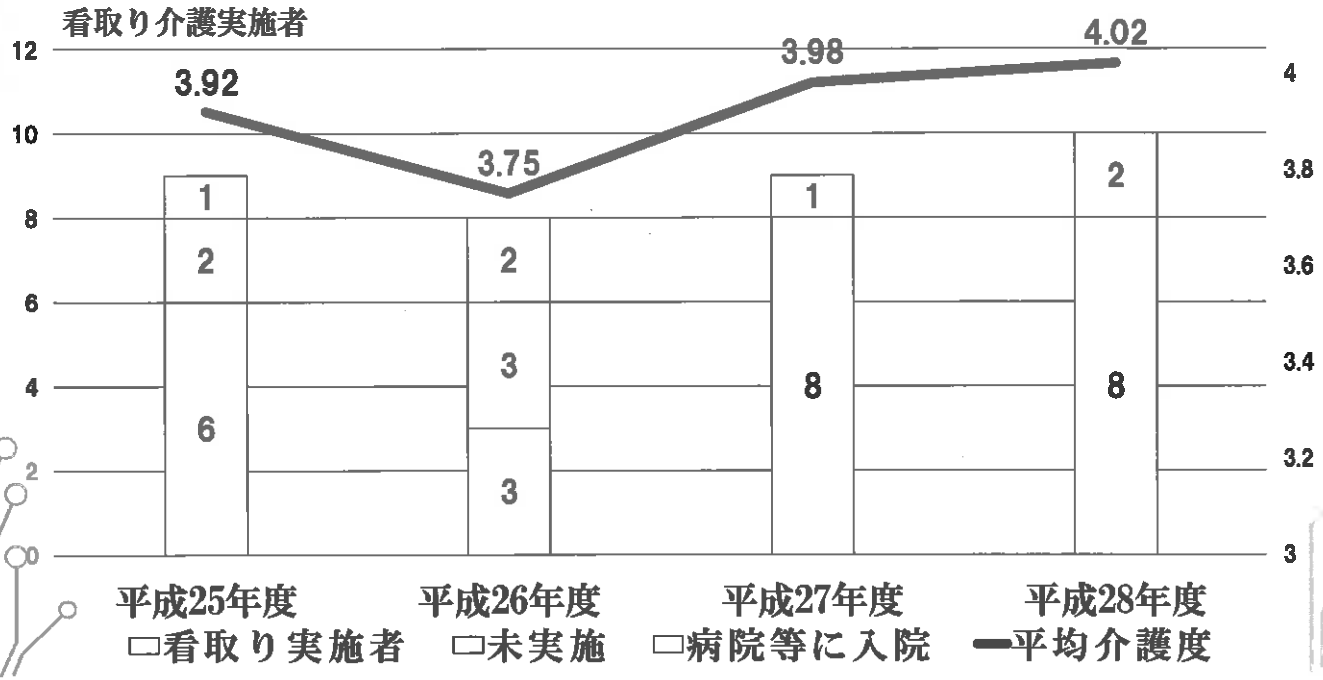
3.職員数　45名（介護31名、看護4名
生活相談員3名、その他7名）

・いいとよでの看取りの現状と課題

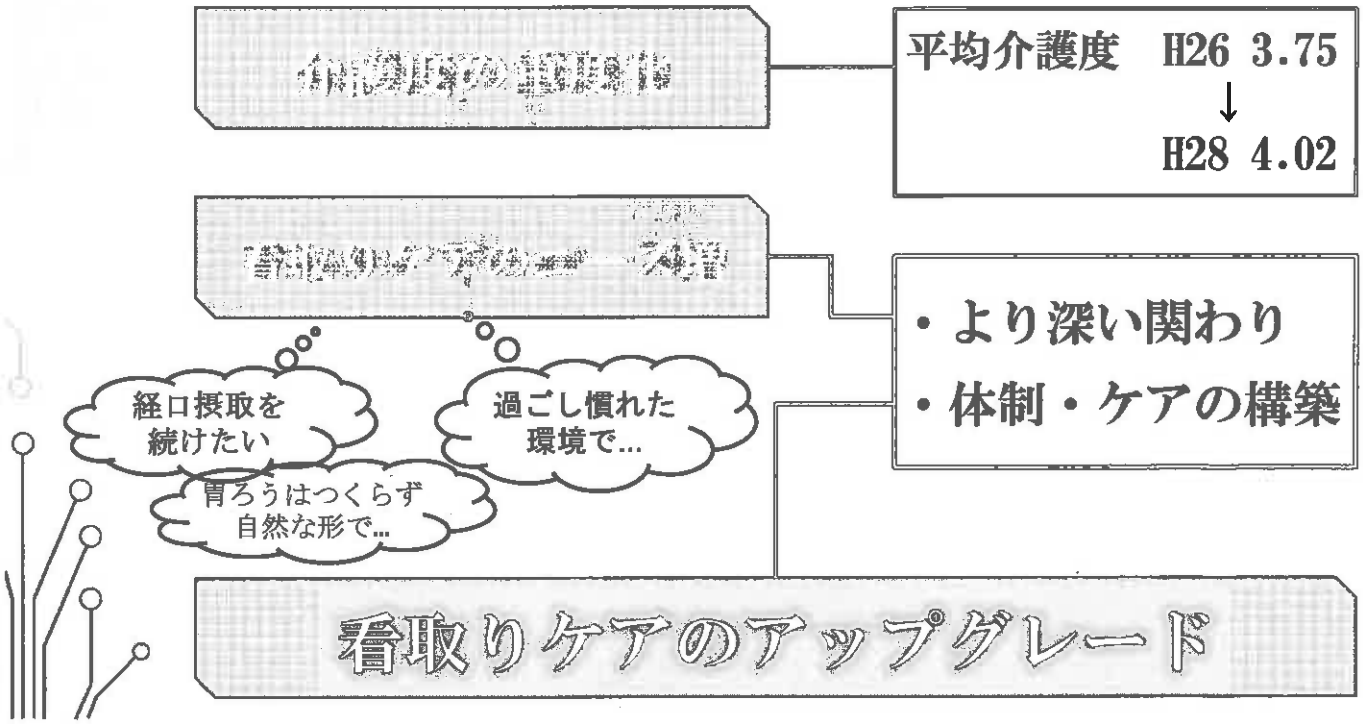
平成25年6月　準ユニット型個室　⇒　完全個室化

静養室での看取り　⇒　ユニットで看取り（H26.4）

・いいとよでの看取りの現状と課題



・いいとよでの看取りの現状と課題



具体的な取り組み

1．職員の意識改革と体制の再構築

2．グリーフケアの実施

3．看取り介護の振り返り

１.職員の意識改革と体制の再構築

職員を対象にアンケートを実施

①ハード面（体制・環境）

・環境整備の強化

②ソフト面（対応）

夜間帯の対応

・夜間体制マニュアルの見直し

２.グリーフケアの実施

グリーフ（grief）とは、深い悲しみの
意味、身近な人と死別して悲嘆に暮れる人が
その悲しみから立ち直れるようそばにいて支援する
事。一方的に励ますのではなく
相手に寄り添う姿勢が大切と言われる。悲嘆ケア

2.グリーフケアの実施

- 食事量・体重の減少
- 発語の減少
- 衰弱

受け止める側の気持ちに寄り添う事がグリーフケアに繋がる

大腸癌の発症から2ヶ月看取り介護を行った事例

Y氏　84歳　女性

入所期間：H25 9/30～H26 11/17　1年2ヶ月

既 往 歴：レビー小体型認知症

老人性精神病、大腸癌

家族背景：夫・娘(長女)　夫も同施設に入所

キーパーソン：娘(長女)

経過	本人・家族の不安	出来るケアの提案
9/28 大腸癌の可能性を主治医から説明	病状の進行 痛み・疲労感	進行状況の十分な説明 痛みの緩和 面会の都度の関わり
10/26 看取り介護開始	食欲低下	食べたい時に、食べたい物を食べられるだけ提供
10/31 看取り介護６日目	残される配偶者との関わり方	不安やケアの方向性を共有するために面談を重ねる
11/17 永眠	残される配偶者との関わり方 今までの看取りに対する思い	長女の希望に沿った関わり方 看取りの気持ちを汲み取り分かち合う

取り組み３
次に繋げるための看取りの振り返り

・振り返りシートを記入

良かったケア

学んだ事

悩んだ事

・デスカンファレンスの開催

・家族にアンケートの依頼

結果

1．職員の意識改革と体制の再構築

看取りケア実践への不安が
共有する場を設ける事で解消された

2．グリーフケアの実施

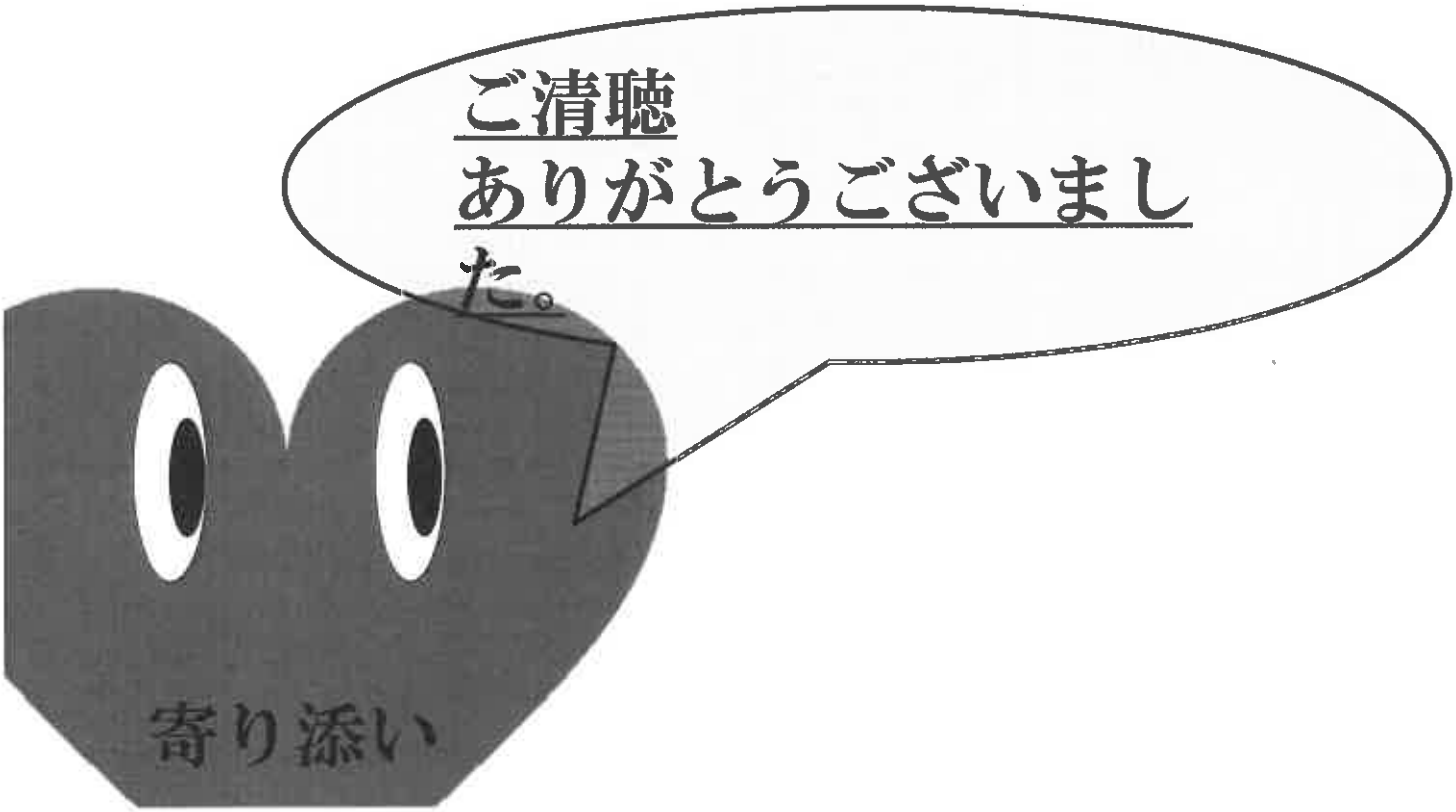
細かな説明・提案をする事で
死に対する心の準備や受容につながった

3．看取りケアの振り返り

次に生かす事が出来る
前向きな振り返りをする事が出来た

今後の課題

体制の強化や本人家族との関わりの充実を図りながら
死生観（自分らしく生き、自分らしい最期を迎えること）
について学び理解を深めることで
人の死に携わる仕事を担うものとして看取り介護に
取り組み続けたい。


ご清聴
ありがとうございました。
寄り添い

看取りケアにおける実態と課題

施設名：特別養護老人ホームいいとよ
発表者：介　護　主　任　　赤坂はるみ
助言者：介護支援専門員　　藤原　幸恵

＜施設の概要＞

1.開設年月

平成 14 年 4 月 1 日

2.事業内容

長期入所 50 名　5 ユニット

短期入所 10 名　1 ユニット

3.職員数

45 名（介護 31 名、看護 4 名、生活相談員 3 名、その他 7 名）

＜現状の課題や目的＞

平成 25 年 6 月に準ユニット型個室から完全個室化となる。それまでは静養室で看取り介護を行っていたが平成 26 年 4 月からユニットで看取り介護を実施。更に、重度化する介護度とともに特養での看取り介護のニーズが増大。本人、家族の希望に沿い変化していく心情に対応し穏やかな最期を迎えられるようにする為には今まで以上に本人・家族との関わりの深さやそれに対応できる施設としての体制、ケアを構築する事が重要ではないかと考え施設で取り組みを実施。

＜取り組み内容＞

1. ユニットで看取り介護を実施していく事に対し、職員の意識改革と体制の再構築。
2. アプローチ方法を具体化し、本人・家族との関わり方をより深める。御家族様のグリーフケアの実施。
3. 次に繋げる為に看取り介護の振り返りを行う。
4. 事例紹介【Y 氏】

＜結果と考察＞

結果

1.ユニット内で看取りを行う事に対し不安に思う事など共有する場を設け、解消に繋げた。

2.看取り時に起こりうる様々な症状や状態、又、本人と家族がどのように接し関われるか提案を行った事で、家族からは死に対する戸惑いが少なくなり心の準備ができたと看取り後に話があった。

3.デスカンファレンスでは前向きな次に生かす事が出来るような振り返りの内容が多く挙がった。

考察

1 つとして同じような看取りの形はなく看取り介護を通して家族や人とのつながり、他職種とのつながりが支えとなりその方の最期に関わる事が出来ている。「人の最期を看取る」ということには大きな責任が伴う。しかし一方で最期を看取ることでこれまでのその人との関わり方を振り返ったり「最期までお世話できて良かった」という思いを抱いたりする事が出来る。ひとつひとつの看取り介護を振り返ることで又、新たなつながりの支えになるのではないかと考える。

＜今後の課題＞

体制の強化や本人家族との関わりの充実を図りながら、死生観（自分らしく生き、自分らしい最期を迎えること）について学び理解を深めることで人の死に携わる仕事を担う者として看取り介護に取り組み続けたい。

＜参考資料等＞